# 第11回 12/7 「デジタル時代の新聞」

**吉田 俊宏**（よしだ・としひろ）**先生**

**日本経済新聞社東京本社**
**編集局文化部編集委員**

**1963年5月長崎市生まれ。神奈川県立平塚江南高校卒。1986年早稲田大学第一文学部社会学専修卒。**

**同年日本経済新聞社入社。文化部次長、奈良支局長、文化部紙面担当部長を経て、**

**2012年4月から文化部編集委員。主にポピュラー音楽と美術を取材。**

**日本レコード大賞審査委員も務める。**

**《講義概要》**

日本経済新聞社東京本社編集局文化部編集委員として新聞業界の最前線でその発展に尽力する吉田俊宏氏が、「デジタル時代の新聞」をテーマに講義を行った。

講義ではまず、国内でいち早く電子版に取組む日本経済新聞社のサイトを実際に見せながら、速報性に優れ、効率よくいつでもどこでも読める電子版と、一覧性を備え、「偶然の出会い」のある紙の新聞について、それぞれの特性やメリット、魅力を詳しく説明した。また、電子版の海外の動向やイギリスの大手新聞社のビジネスモデルについても解説し、世界で成長し続ける電子版の実態と現状を示した。電子版の様々な活用方法やサービスを紹介するとともに、今後の電子版ビジネスについて、デジタル技術と読者の変化に柔軟に対応することや、コンテンツにオリジナリティーを持つことなどが重要なポイントであると言及した。

最後には、「電子版と紙の新聞両方の特徴、良さを活かして情報を発信し、受取る消費者も両方のメリットを活用して欲しい」と伝え、今は新聞文化の変革の時期であり、今後の新聞産業はどうあるべきか、これからも研究して欲しいとメッセージを残した。デジタル時代の新聞産業のあり方を考察する上で必要な知識と考え方を示す講義となった。

## 《受講生の感想》

●今日は吉田先生の貴重なお話を聞き、デジタル化が進む現代において、紙媒体で情報を得ることの価値について気付くことができました。デジタル化したことによる利点や恩恵を私たちは多くの場面で享受して生きています。しかしながら吉田先生が言われていたように、時間をかけて辞書で調べること、新聞を１枚１枚めくることによって、思いがけない発見や新たなる関心を見出すことができます。私は今日のお話を聞き、ネットだけでなく、紙媒体も並行して利用していこうと思いました。　立命館大学・産業社会学部・3 回生

●有料電子新聞が世界で成長を続けていることを知り、とても感心しました。紙からネットやスマートフォンというように形は変わっても、その中身（コンテンツ）は変わらないと考えます。これからも形ではなく、その中のコンテンツを重視し、消費者の期待を満たすことのできるコンテンツを生み出すことが重要だと思いました。　立命館大学・産業社会学部・2 回生

●新聞を読むようになって感じる紙の新聞の長所は、やはり様々な記事に出会える機会が提供されることだと思います。これは大量の情報が流れている現代において、厳選された情報の中で新しいものに出会えるというのはとても貴重な場だと思います。デジタル化の現代だからこそ、やはり紙新聞の存在はなくてはならないものだと感じました。

立命館大学・産業社会学部・3 回生

●新聞紙や紙の辞書は自分が知りたい情報以外の情報も必然的に目に入るようになっています。視野・知識を広げるためには紙は必要不可欠です。ただ、情報の速さという点では、電子版の方が優っていて、また、レスポンスも電子版が早く、効率的に読者の声を知ることができる利点があります。どちらにもメリット・デメリットがありますが、両方有効活用することが大切だと改めて感じました。

立命館大学・映像学部・2 回生

●紙媒体・電子新聞それぞれのメリット・デメリットがあるので、どちらも上手くいかせることが望ましいと思う。私は様々なメディアをスムーズにつなげ、人々がより触れやすくできるようにしたいと考えているので、先生のお話しにはとても共感を覚えました。実際に新聞に直接関わる先生の「生」のお話しを聞くことができて貴重な経験となった。

立命館大学・産業社会学部・2 回生

●一番印象に残っている言葉に紙の媒体には偶然性があるということで、とても納得させられました。また、電子版記事なら世界中に発信できるというのはいいことだと思いました。紙・電子どちらも大切な存在であること、どちらももちろん記者のジャーナリズムとしての情熱は全く変わらないことを感じました。

立命館大学・映像学部・2 回生